

# 「白衣を脱いだ医師」の国際協力再考 —中村哲の理念、方法、実践—

四 本 健 二\*

## はじめに

2019年12月4日、医師の中村哲（ペシャワール会アフガニスタン現地代表）が、アフガニスタン東部ナンガルハール州ジャララバード市内を車で移動中、何者かに銃撃されて死亡した。中村の死は、日本で広く報道されたばかりでなく、アフガニスタンの人々にも衝撃を与えた。アフガニスタンの首都カブール郊外にある空軍基地では、ガーニ大統領自らが帰国の途に就く中村の棺を担い、郷里である福岡の空港には大勢の在日アフガニスタン人が「守れなくて申し訳ない」という日本語の横断幕を掲げて中村の棺を迎え、彼の死を悼んだ。後日、中村の葬儀・告別式には、親交のあった人々約1,500人が参列した。

各種の報道から、中村に対する襲撃は周到に準備され、手際よく且つ執拗な殺意をもって実行されたことと「不幸な偶然」が重なった結果であることが推認できる。詳細は、現地の捜査当局による発表を待たなければならないが、第1に、襲撃当日の中村らの行動は、追尾されていたか沿道に配置された見張り役によって、リアル・タイムで実行犯に通報されていた節がある。そうでなければ、白昼の市街地で中村らの車列（2台）だけを待ち伏せて前後から挟み撃ちにはできなかった。第2に、不幸なことに本来は中村の乗るピックアップ・

---

\* 関西大学政策創造学部非常勤講師、神戸大学大学院国際協力研究科教授

トラックの荷台で四方を警戒する武装ボディ・ガードが、この日に限っては全員車内にいて対応が遅れた。2台の車に分乗した実行犯は、まず車列の行く手を遮り、次に後続車のボディ・ガードを射殺したのち、彼らの銃を奪って中村が乗る先頭車を銃撃した。さらに重傷を負った中村に留めの銃弾を浴びせた上で、ものの数分のうちに全員が逃走した。この襲撃で中村を含む6名が亡くなったが、後続車の運転手だけは幸い難を逃れた。

日本での報道は、1,600本の井戸を掘った、25km以上に及ぶ灌漑水路を拓き、旱魃と内戦によって荒廃した農地を緑化して10万人の人々の営農を可能にした、マグサイサイ賞をはじめとする数多の賞を受賞した、という定量的な事実によって中村の業績を讃えている。

こうした業績を残した中村の理念とは何だったのか、その理念は、どのような方法によって実践されたのか、そして、中村はなぜ殺されなければならなかったのか。幸い中村は多くの著作を残している。また、清水展（清水、2007）<sup>1)</sup>、初瀬龍平（初瀬、2005）<sup>2)</sup>、丸山直樹（丸山、2001）<sup>3)</sup>が中村とのちに紹介する「ベシャワール会」について論じている。これらを手がかりとして右の疑問に定性的な答えを導き出そうと試みるのが本稿の目的である。

## I. 医師としての中村の歩み

### 1. 医師、中村哲の誕生

福岡市に生まれた中村は、九州大学医学部を卒業し、国立療養所の精神科医を皮切りに脳神経外科病院の日本神経学会認定神経内科医として医療現場を歩み始めた。この間、1978年に福岡登高会のティリチ・ミール（ヒンドウクッシュ山脈最高峰、標高7,708m）遠征隊に同行医師として参加し、初めてパキスタンを訪れている。標高3,800mのベース・キャンプ予定地に向かう道中のことを中村は「我々は連邦政府の観光省から住民の診察拒否をしないように申し渡されていたので、みちみち病人を診ながらキャラバンをつづけていた。我々が

進むほど患者たちの群れは増え、とてもまともな診療が出来るものではなかった。有効な薬品は隊員たちのためにとっておかねばならぬ。処方箋をわたしたとしてそれがバザールでまともに手に入るとは思われない。結局、子供だましのような仁丹やビタミン剤を与えて住民の協力を得る他はなかった。ある時、咳と咯血で連れてこられた青年がいた。父親が治療を懇願した。診ると明らかに進行した結核だったので、直ちに町に下りて病院でちゃんとした治療を受けるように申し渡した。ところが、父親が答えていわく、『町でちゃんとした治療が受けられるなら、わざわざ二日もかけて先生のところまでこない。第一、チトルールやペシャワールに下るバス代がやっとで、病院についても処方箋だけ貰ってどうせよというのか』これには返す言葉がなかった」（中村、1992：11）と述懐し、「重い気持ちでキャラバンの楽しさも半減してしまった」（中村、1993b：13）と当時の心境を吐露している。これが、中村の発展途上国での最初の診療体験となった。その後も中村は「趣味である蝶や山々に引き付けられ」（中村、1999：21）、たびたびパキスタン北辺を訪れている。

## 2. 日本キリスト教海外医療協力会派遣医師としての中村哲

キリスト者であった中村は、1984年にペシャワール・ミッション病院（以下、ミッション病院）からの応援要請を「ある種の義侠心に駆られ、『まんざら知らぬ土地ではありませんから』と半ば気軽に」（中村、1999：22）引き受け、日本キリスト教海外医療協力会（以下、JOCS）の派遣医師としてパキスタンに赴任した。ちなみに1982年にミッション病院への応援派遣について中村に白羽の矢を立てたのは、1962年から18年間ネパールでJOCSの派遣医師として、結核をはじめとする感染症の治療と予防、栄養改善に取り組み、マグサイサイ賞を受賞したJOCS 理事・神戸大学医学部教授の岩村昇医師であった（中村、1999：21-22）、（丸山、2001：85-88）。当時の心境を中村は「当地への赴任は最初にヒンドゥクッシュ山脈を訪れたときの一つの衝撃の帰結であった。同時に、余りの不平等という不条理に対する復讐でもあった」（中村、1992：12）と綴ってい

る。このときすでに中村の脳裏には、パキスタンの患者の背後に日本の医療水準とは比べようもない「余りの不平等という不条理」があることが刻まれていた。また、中村の赴任に呼応して、福岡では中村の登山仲間や医療関係者らが「ベシワール会」を立ちあげ、中村を側面から応援する活動を始めた。JOCSが人は送っても金と物は送らない、という方針を採っていたからである。

中村は、赴任までの2年間でミッション病院の事前視察、ハンセン病（癩、らい）<sup>4)</sup>専門医となるための国立療養所邑久光明園での研修、ロンドンでの英語研修、リヴァプール熱帯医学校での研修に費やしている。キリスト者なりの実践、「ある種の義侠心」、それらの実践を支える中村の周到的な準備と行動力は、当時からその片鱗をみせていたといえよう。

### 3. ハンセン病専門医としての中村

当時、パキスタン北西辺境州（現在のカイバル・パクトゥンクワ州）には約2,400名のハンセン病患者が登録されていたが、そのほとんどは外来治療で、中村が赴任した当時のミッション病院らいセンター入院病棟（以下、病棟）は20床、入院患者16名、ハンセン病診療員2名とその助手1名、という余りにも貧弱な診療態勢であった。

国際協力といえば聞こえは良いが、医療分野に限らず、専門家の姿勢や資質の違い、派遣先や派遣元の都合、功名争い、果ては資金の奪い合いまで対立の種は尽きることがなく、当事者たちが複雑に合従連衡すれば、たとえ病院という同じ職場、患者を救いたいという情熱を共有していたとしても、協働は難しい。中村は、着任当初から相互に対立するグループと等距離を保ち、患者の治療と病棟の運営に専念しようと努めていたようである。しかし、否応なくいざこぎに巻き込まれたことも隠さずに書き残している（中村、1999：49-61）。対立の構図を要約すれば、ベルギー人グループとパンジャブ州出身のパキスタン人院長との衝突に端を発し、ドイツ人グループ、ベルギー人グループ、イギリス人グループの対立は、同じキリスト者のあいだに相互不信の三角関係を引

き起こした。この対立は、現地のパシュトゥーン人スタッフのベルギー支持派とドイツ支持派への分裂を招き、加えて、院長をはじめとするキリスト者のパキスタン人、よそから赴任してきたイスラーム教徒（以下、ムスリム）のパキスタン人と地元出身のパシュトゥーン人が同じパキスタン人でありながら、もうひとつの対立の三角関係を形成し、相互不信と反目は増すばかりであった。こうした対立を中村は、1992年に出版された著作では「余りの露骨さに、私も初めは呆れるのを通りこして面白半分に見ていたが、彼らにはどこか憎めぬ魅力がある。余りに人間的、という表現が適当とは思われないが、悪いことも良いことも弱さも強さも単純で解り易く、天真爛漫に性悪でかつ貴族的な高貴さを秘めているのである」（中村、1992：55-56）と観察している。その背景には、中村の「個人的に言えば、私は人間に興味があった。らしいの仕事に携わる者は、その愛憎、醜悪さと気高さ、怯懦と勇氣、深さと軽薄、怒り、哀しみ、喜び、およそあらゆる人間事象に、極端な形で直面させられるからである。治療する者もされる者も、そこには濃密な人間が影を落としている」（中村、1992：42）という関心があり、1993年の著作では2頁の簡単な事実関係の説明に続いて「まったく現地風の、ややこしい割拠対立の縮図である」（中村、1993b：40）と、ことの次第を端的に述べている。他方、1999年の著書では、再度この問題を取り上げ、事実関係の説明に12ページを割いた上で、もう1頁、ドナーと現場当事者の相関図を加えている（中村、1999：49-61）。結局のところ、中村は、ペシャワールの苛酷な医療現場における人々の姿をとおして、人間の喜怒哀楽や極限状態における人間への興味の核心を自分がどのようにみているか、書き留めておこうとしたのではなかろうか。この筆者の推測は、中学時代の恩師「中村に洗礼を決意させるほどの感化を与えた」（丸山、2001：66）藤井健児牧師が丸山に語った『『今の医学は、人間を物のように扱う。機械のように扱う』と。（だから）『自分はこういうのに合わないから、精神科に進むのだ』と』（丸山、2001：42）という中村自身の発言とも一面で附合する。

#### 4. 病棟における中村の成功と失敗そして教訓

中村は、赴任前にJOCSの先輩たちから「一年目二年目は寝て待て」（中村、1999：37）という助言を与えられていた<sup>5)</sup>。しかし、中村が赴任した当時の病棟は、「診療施設というより、包帯巻きをしている安宿と呼んだ方が正確」（中村、1992：53）なありさまであった。しかも、名目上病棟に配属されたスタッフは病院全体の業務に従事し、診療資機材を消毒して準備する病院の中央材料室に相当するところも使えず、消毒して再利用できるものも病棟に限ってはすべて廃棄、他科のスタッフは病棟にはよりつかず、手術室も貸してもらえない「院内でも見捨てられた付録」（中村、1999：59）の様相を呈していた。中村は、さっそく職員に消毒、清潔（無菌状態）、不潔といった基本的な躰を徹底し、患者の助力も得て病棟の隅にベニヤ板で仕切った手術場、手洗い場、消毒室を自らの大工仕事とペンキ塗りで造り、術前処置、器具選定、消毒、使用後の洗浄、果ては患者の搬送からシーツの洗濯までをもこなしながら、我流のやり方押し通そうとする職員の基礎訓練にも利用した。このいきさつを中村は「窓枠とペンキ塗りだけが残っていたので、病院当局は『請負の職人』を差し向け、労賃をペシャワール会から取ろうとした。だが、何日待っても仕事が進まないの、私は『要らない』と突っぱね、自分で黙々とペンキを塗った。そのうち、見ていた患者たちが出てきて私を手伝い始め、何事もなく済んだ。『わずかなペンキ代くらい』と思うだろうが、カネの問題ではなく、人間の誠意の問題である。かつ、患者たちも『自分たちの病院』という愛着を強めて、我が家のように利用されるようになった」（中村、1999：69）。この短い文章の中に3つの着目すべき点が含まれている。第1に、中村の行動力はいつものことながら「できることは自分でする」という姿勢、第2に、「人間の誠意の問題」は何に向けられた誠意かという問題である。それは、一刻も早く手術場を必要としている患者のための誠意とも読み取れるし、ペシャワール会の大切な寄付を無駄にしないというドナーに対する誠意とも読み取れる。そして自分に対する、できることを他人任せして放ってはおかない、という自らの信条に対する愚直な

までの誠実さとも理解できる。第3に、とりわけ筆者は、本来、受益者である患者たちが自発的に中村を手伝ったことに注目する。お医者様にペンキ塗りなどさせてはいけない、という彼らのプライドの問題か、中村先生がやるなら我々も一肌脱ごうという患者なりの義侠心の発露とも受け取ることができる。短い期間のうちに患者たちと中村のあいだには、中村の誠実な働きぶりを介して信頼感、一体感が醸成されていたことが窺える。請負職人が来たなら、患者たちは退屈しのぎに見物こそすれ、手伝いはしなかったであろう。このことは、患者と中村とのあいだに醸成された信頼関係を基礎とした患者の自発的な援助過程への参加と、その結果として生じた患者たちの『自分たちの病院』という愛着」、すなわち援助成果に対するオーナーシップが生じたことを示唆している。さらに中村は「気の利く若い患者を手術助手にしたりした。（中略）正式のトレーニングを積んだはずの『お医者様』が、読み書きもできないらい患者の少年に負けるとなれば、それだけでも圧力になる。滑稽なまでの誇り高さは現地の気風であるから、これは技術改善に効果できめんであった。患者たちは病棟スタッフたちをよく観察しており、損得抜きに病友の治療を手伝うようになった。（中略）弱い者は人の誠意を敏感に嗅ぎ取る。ともすれば慈善事業宣伝の道具になってきた彼らは、私の出現による『新情勢』に活気づけられた。その頃、らい病棟が少ないスタッフで機能的に回転するのを不思議がられたが、これら比較的健康な患者たちの協力があったからである」（中村、1999：65）と述懐している。そして「九年の歳月をかけて『安宿』は『病院』らしくなり、基本的な手術もふくめ、おおかたの合併症はベシワールでこなせるようになった」（中村、1993b：64）。この過程で中村が見つけたことは、足底穿孔症（うらきず）の深刻さであった。進行したハンセン病によって末梢の感覚神経が冒され、足底の傷を痛いと感じなくなると怪我や火傷に気づかず、進行すれば、足底にあいた孔が新たな感染症の原因となる。病棟では、入院理由の約6割がこの足底穿孔症によって占められ、入退院を繰り返す患者の社会生活にも離婚や失業といった問題を引き起こすばかりでなく、治療に使う抗生物質やギブスの費用



が病棟の財政を圧迫した。中村は、予防的見地から患者が履くサンダルの改良を思いつき、日本から材料を大量に持ち込んだが、「技術的な苦労話は割愛するが、結果から言うと日本からの『技術移転』はすべて失敗した」(中村、1999: 68)。そこで中村は、バザールでサンダルを買っては自らそれらを履いて歩き回り、分解しては改良を加える試行錯誤の末、足底穿孔症対策のサンダルを開発した。援助にありがちな「ないからもってくる」発想を「地元にあるものを使う」ことにしたのである。これは地元の民族衣装・履物にこだわるパシュトゥーン人の気質にも合致し、援助の持続性と受容性の向上という観点からしても有効であった。かくして病棟の敷地内にサンダル・ワークショップを開き、1足400~500円程度の材料費をベシヤワール会が負担し、200円程度で販売、その収入をワークショップで働く患者たちに労賃として支払った。ここでも中村は「援助でタダで貰った物は大概粗末にするか、あるいは使いこなせないか、最悪の場合は売ってしまうが、自分で作った物や買ったものは大切に使う」という「援助の法則」を実践していた<sup>6)</sup>。この顛末を中村は著書のなかで「『海外援助』のものものしいふれこみとその実態を苦々しく眺めてきた我々にはこれは大変愉快な事であった」(中村、1992: 68)と喜びを隠さない。蛇足ながら、着目すべきは、患者が自らの労働の対価として労賃を受け取れたことである。貧しく、将来を展望できなかったであろう患者たちには、これは貴重な収入源となり、なにより自分が社会(病友)の役に立っているというプライドや自己の価値を取り戻す契機となったことである。また、足裏穿孔症で入院してきた女性患者が、退屈しのぎに荷造り用の麻紐でバッグを編み始めた。中村は麻紐を買い込み、他の患者への技術指導を頼んだ。この編み物熱が患者の入院ストレスを緩和し、喧嘩や歩き回る者も減り、ベッドで安静にして編み物に熱中するので入院期間の短縮、経費の節減にも功を奏した。中村らもバザールで安価で良い麻紐を探し、自ら紐を染色した。中村は「麻紐の染色に熱を入れるのも大切な診療の一つ」(中村、1992: 97)と語っている。

その後、中村は、1979年にアフガニスタンに侵攻したソ連軍と反政府武装勢



力との戦闘を逃れたアフガン難民のハンセン病患者への対応を迫られた。「死者200万人とも300万人とも言われ、爆撃で破壊された村落5000以上、難民となって国外に逃れた者約600万人、人口が半減してアフガニスタンの国土は壊滅的な打撃を受けた。この難民のうち北西辺境州とペシャワールに逃れたものが270万人に達した」（中村、1999：91-92）からである。中村は、北西辺境州バジョウル自治区の難民キャンプとそれらの周辺村落の住民を対象にハンセン病患者の治療のためにワセリンをドラム缶ごと購入し、皮膚病薬を調合した。難民キャンプでの生活を中村は「貧しても鈍せず」（中村、1999：104）という見出しをつけて「私たちの手持ちの食糧が切れると、空腹を抱えるキャンプの住民が、乏しいパンを分かち合い、食を共にしてくれた。（中略）後日、日本で難民キャンプの写真を見せられ『ひどいものですね。人間が生きているとは思えません』と言われた時、私はこの時の事を思い出した。反論したいが、ことばが見つからないのである。しかし、どんな極限状態でも人間が人間らしさを失うとは言えない。逆に、『衣食足って礼節を知る』とは限らない」（中村、1999：104-105）と振り返っている。中村が「パキスタンとアフガニスタン、パシュトゥンとカブール出身者、パシュトゥン人とパンジャーブ人、キリスト教徒とイスラム教徒、外国勢力と地元勢力、これらの範疇は二重三重に重なって、機に応じ、所に応じ、人々は結束と対立をくりかえす」（中村、1999：121）<sup>7)</sup>厄介に悩まされながら、「何も知らぬ異国の人、『お人よしだが忘れっぽい日本人』を押し通し、常に超然とこれらの範疇を無視して行動」（中村、1999：121）してアフガン人による巡回診療チームを立ち上げ、1986年にペシャワール会の資金援助を受けてアフガン・レプロシー・サービス（以下、ALS）を立ちあげ、1988年には、ハンセン病以外の診療をも射程に入れて日本－アフガン医療サービス（以下、JAMS）へと改称し、ヒンドウクッシュ山脈以北で使われているペルシャ語によるハンセン病診療員養成コースを開き、人材養成にも手を広げた。同時にミッション病院の病棟も、1989年に20床の「安宿」から70床の新病棟へと変貌を遂げ、1990年からはJOCSの女性医療従事者も加わり、女性患者への対応が大

幅に改善された。こうした活動によって北西辺境州のハンセン病患者登録数は、4,500名を突破した。中村は、多忙な日々をおくったが、これらは次の展開を見据えての準備であった。中村は「一九八八年五月、アフガニスタンからソ連軍撤退が始まったとき、ALSの私たちも転機に立っていた。まず、難民とは一時的な滞在者であって、らい根絶計画という気の長い計画を実施するためには、彼らが帰った後のことも射程に入れて考えなくてはならない。第二に、らいの多発する場所は、同時に他の感染症も多く、かつ医療設備のない所が普通である。『らいでないから診ません』という訳にはいかない。第三に、らいは他の病気に比べれば発生数が少なく、急性のものでもない。らいだ、らいだと騒ぐと反って特別な病気と思われる。一般感染症の一つとしてさりげなく診るべきである。このような大局に立って見ると、大きくは『山村無医地区の診療モデル』ともいふべき態勢を要所々に確立し、共同体ぐるみの福祉活動の一環として組織的な医療を実施すべきだと考えられた」（中村、1999：109-110）と説明している。

## Ⅱ. 中村のJOCS退会とペシャワール会

### 1. 中村とペシャワール会の「三無主義」

このころ、日本では「中村のやり過ぎ」（中村、1999：128）が問題となっていた。論点は、協力先をキリスト教系団体に限定する、というJOCSの方針に背いたこと、JOCSが政治性があるとみなした日本大使館の支援を受けたことであった。当時は、国際電話や手紙を介しての東京との連絡手段も十分に確立されていなかったのも、中村には十分に現地の事情を説明する術も時間もなかった。そこで中村は1990年に6年にわたるJOCS派遣医師としての活動に終止符を打ち、結局、かつて勤務していた福岡の脳外科病院に拾われた。中村を温かく迎えた院長の言葉に「私は言葉をつまらせた。私の机も、名刺も、そのままにしてあった。まるで『いつ帰ってもいいよ』と、さりげなく手を広げてく

れていた様である。（中略）後は、ただその情けにすがって生きてきた。さかしい議論ばかり横行して実のない世間を見てきた私は、文字通り、救われたのである。実に、このような支えが背後にあって、以後の活動を継続できたのである。（中略）私にとって、いい年をした大の男が、家族丸抱えて生活の面倒をみてもらうのも内心気が引けた。私はおそらく骨の髄まで日本人であって、恩義や義理だのという古くさい観念から抜けきれない。報いれぬ恩義は時に負担ではある。（中略）『わし（脳外科病院長、引用者注）が悔しかとは、先生を置くことで、他人から自己宣伝のごと勘ぐられることだけたい』（中村、1999：134-136）という理解者の人情に心を打たれる感性の持ち主である自分を「無思想、無節操、無駄の三無主義」とはぐらかし、それが案外受けたと無邪気に喜んでもいる。中村は自らの「三無主義」を「思想信条にとらわれず、浄財だと思えば誰からでも寄付を仰ぎ、時には試行錯誤の無駄がいる。（中略）歯の浮くような立派なことは言わん。口先ではなく、やることで勝負する」（中村、1999：136-137）とその真意を語っている。これは中村が唯一明言した己とペシャワール会の「主義」である<sup>8)</sup>。清水は、中村の三無主義を「そもそも三無主義とは、『無気力、無関心、無責任』を指し、六〇年代から七〇年代にかけて学生運動が高揚したあと、祭りの後の虚脱感と白けた気分を生きる若者の生の形を、嘆息したり揶揄したりして指す言葉であった。おそらく中村は、この言葉の本来の用法をふまえた上で、それを換骨奪胎して、半ば照れ隠し半ば真面目に、会（ペシャワール会、引用者注）の方針を示す言葉として唱えていると考えることができる。（中略）本来の三無主義を転倒し、それに代わって、気迫と責任をもって現地に介入関与する中村と、それを支えるペシャワール会の熱い思いがはっきりと透けて見える」（清水、2007：131）と解説する。蛇足ながら、筆者は、中村の三無主義を相手の思想・信条と自らの思想・信条との異同を棚上げし、受益者（患者、住民）の最善になるなら協働する相手を選ばない縦横無尽さと医師が靴屋にでもペンキ塗る職人にもなる変幻自在さをもって周到な準備の一環とし、時間、労力、費用のかかる試行錯誤を恐れず、最善の選択肢がみつか

れば果敢に実行する行動力、すなわち理念、方法、実践の指針の組み合わせとみている。良い結果を求めて邁進する中村の思考と行動は「臨床医学は、結果で勝負がつく。つまらない論争をしても仕方がない。治るか治らないかがものを言うのである」(中村、1999: 65) という自身の言葉にも表れている。

### Ⅲ. アフガニスタンへの進出

#### 1. 中村のよりどころの変遷

中村は、ペシャワールにおいて、のちにアフガニスタンにおいても新たな組織を立ちあげ、次々と事業を展開してゆく。この経緯を中村は「病院建設に先だって実現せねばならなかったのは、新生 PMS の合法性である。これは前年九六年秋の段階ですでに着手されていた。JAMS (日本－アフガン医療サービス) はアフガン難民救援団体であり、『アフガン難民が帰った』とパキスタン政府が認識する時点で自動消滅する。また、ペシャワール・ミッション病院を出た後、1994年に発足した PLS (ペシャワールらいサービス) とその福祉法人 PREP (ペシャワール会・リハビリテーション・エクステンション・プログラム) は、北西辺境州政府認可の地方組織で、免税特権など連邦政府レベルの交渉がやりにくい。そこでイスラマバードのパキスタン連邦政府に打診すると『十年前と違って、国際団体として申請するのは大変な回り道、かつ可能性が薄い。それよりも名称変更を行って現在のステータスを維持する方が良い』(中略) この勧告に従って、九六年十二月に登録名称の『JAMS』(日本－アフガン医療奉仕サービス) を『PMS』(ペシャワール会医療サービス) に変更、旧名称は公式の書類から外し、『PMS アフガンプロジェクト = JAMS』として存続させることとした。(中略) ペシャワール会は、中央政府の国際団体であると共に、北西辺境州認可の福祉法人として、二重の合法的地位を固め、万全の備えとしたのである」(中村、1999: 312-315)<sup>9)</sup>。その結果、『「外国人に禁止されている土地取得」、『福祉活動と見なされる病院経営』、『日本人ワーカーを受け入れるた

めの就労ビザ発給資格』が可能になった」（丸山、2001：230）。

## 2. アフガニスタン山村無医地区での診療

さきに挙げたJAMSの山村無医地区の診療モデルは、継続的な診療の実施を前提としていた。そこで計画を実行に移す準備として、中村らは山村無医地区診療を支える人材養成コースを開くこととし、受講者の選抜基準を「直接予定活動地から抜擢することであった。どんなに優れていても故郷に愛着のない者は採用せず、『自分の村の再建』への情熱を重視」（中村、1993a：32）した。将来の担い手を育て、土着化を視野に入れたJAMSは、その誠実な働きぶりによって北西辺境州の住民やアフガン難民のあいだで知られるようになり、ペシャワール大学医学校付属病院では、中村がかつての専門を活かして神経病学の症例検討会（カンファレンス）を定期的に関き、教科書を翻訳して提供するなどしてペシャワールの富裕層や行政機関にも信頼を得た。さらに、難民問題を一手に仕切る北西辺境州政府の難民コミッショナーとは偶然、妻の関節痛の治療が縁となって良好な関係を築き、日本から届く物資の通関手続きにも便宜が図られた。この点について中村は「私は利用する積もりで意図的につきあいを深めた覚えはない。（中略）彼は一貫してパシュトゥンとしての友情で私を遇した」（中村、1993a：40）と説明している。JAMSは、1988年にアフガニスタン国内に診療所の開設を計画し、翌1989年には診療員養成コースを開講、1990年にはパキスタン北部の村にJAMS診療所を開設して診療員に実務経験を積ませ、ペシャワールからスレイマン山脈を挟んで西方向、ペシャワールから車で10時間、徒歩で3日のアフガニスタン領内クナール川沿いのダラエ・ヌール渓谷の村に最初の拠点診療所を作るべく、ソ連軍が去った後の内戦の鎮静化を待った。

1978年にナジブラー社会主義政権が誕生し、近代化を推し進めようとした結果、軍閥各派、武装した農民による反政府武装闘争は、1979年のソ連によるアフガニスタン侵攻以後、ソ連軍・アフガニスタン政府軍・反目し合う諸党派による混沌とした内戦に発展し、1989年のソ連軍撤退後は、首都カブールとア

フガニスタン全土の支配権争奪戦へと構図を変えた。1992年にはナジブラー政権が崩壊し、諸党派、軍閥が割拠する辺境の地はもちろんのこと、無政府状態となった首都もジハード（聖戦）<sup>10)</sup>を標榜する諸党派によって分割占領された。1994年にはターリバーンが実権を掌握し、内戦状態は、一応の決着をみた。その一方で、堰を切ったようにアフガン難民がパキスタンの難民キャンプから帰還を開始した。その頃、JAMSはダラエ・ヌールに悲願の診療所を開設し、帰還難民の診療に備え、他方でJAMSペシャワール診療所には、患者が溢れていた。国連も撤退し、難民医療機関がJAMSだけになってしまったからである。それでも中村は、ダラエ・ヌール渓谷北方のダラエ・ビーチ渓谷の村に第2の診療所を開設すべく準備を進めた。山脈を境に南のパシュトゥーン対北の非パシュトゥーンという構図が現実味を帯びてきたからである。

#### IV. 医者、井戸を掘る

##### 1. 飲料水確保計画

2000年には旱魃による飲料水の欠乏から赤痢などの腸管感染症が大流行した。ヒンドゥクシュ山脈の冬の降雪量が少なく、アフガニスタン東部では、伏流水を汲み上げていた村の井戸が次々と涸れていったのが原因であった。他方、パキスタンでは「1ヵ月交替のわがPMSチームがパキスタン側にあるヤルクン河上流のラシュト診療所に赴いた。ところが、もともと險路の上、氷河の崩落で河がせき止められて上流が増水、診療所付近まで浸水したとの知らせがあった。ところがわが医療チームは指令に背き、恐れをなして逃げ帰ってしまった。一方、この災害が起きたとき、ラシュトに滞在していたのはヌル・アガ医師以下職員六名、交替のため、下流のマスツジ村診療基地に戻ろうとしていたが、退路を断たれ、徒歩で山中の道を二日かかりで帰った。その頃には、すれ違いに赴いた前述のチームも狼狽のあまり、事態を確認せぬままペシャワールに戻っていた。病院側は被災民の緊急救援隊を別に組織して、やっと三日後に

送るありさまだった。崩れ落ちてきた氷河は、ラシュト村から約四キロメートル下のインキープ村を襲った。大量の土石流と氷雪がヤルクン河の急流をふさぎ、突然ダムをなして上流の村々を浸水させた。これは昔から同地に居住する住民も経験したことのないもので、村々はパニック状態に陥った。わがPMS診療所があるラシュト村の河沿いの家々も浸水し、診療所から四〇〇メートルのところまで水が迫った。驚いた住民は河から五〇〇メートル程離れた小高い丘に逃げ、約二百世帯が野宿生活を余儀なくされた。（中略）診療所はまる三日間空になり、肝心のときに救援活動のタイミングを失った。『道路が塞がって到着できない』というのが逃げ帰った交替チームの言い訳であったが、一五〇名の中隊（チトラールに駐屯するパキスタン政府軍、災害発生の翌日には一個中隊が現場に急行し、緊急援助にあたった。引用者注）が行けたのだから、通れないはずがない。わがPMS病院は面目まるつぶれとなった。私は交替に赴いたターヘル医師の臆病・無責任とみて同医師の懲戒免職を行い、即時に別のチームを困難の末に派遣したわけである」（中村、2001：16-18）。突然の事態に現場が混乱の極みにあったことは容易に理解できるが、貴重な医師を即刻懲戒免職するにあたって「泣いて馬謖を斬る」といった表現は見当たらず、「結果で勝負する」という中村の、ときに冷徹な一面が行動に出たエピソードである。結果的に住民に死者・負傷者もなく、避難民キャンプでの通常の診療で事態は収束をみた。しかし、中村らはガラエ・ヌールを起点に急遽「飲料水確保計画」をすすめなければならなくなった。2000年7月に始まった井戸掘りによって13カ所で飲料水を確保、19カ所のカレーズ（地下水路＝横井戸）の修復に着手し、16カ所で取水が可能となった。しかし、そのあいだも内戦は続き、飲料水の欠乏によって感染症は蔓延し、家畜は死んだ。離村する農民も増えるなか、村人とともに既存の井戸底の水面からさらに10m深く掘り、ポンプで水を汲み上げて飲料水を供給する初期計画を立てたが、ここで問題が発覚した。「ガラエ・ヌール、アムラ村の成功は主としてカレーズ（地下水路）の再生によるもので、井戸の掘削は遅々として進んでいないことが分かった。予定の『水位から十メ



ートル』を達成した例はない。可能ではあろうが、掘り始めて二ヵ月を経過、三ー四メートルがやっとである。『成功』というよりは、作業を進めるための排水で住民が潤されてきたというのが真相だった。最初の『成功』に幻惑されて自信過剰になっていたのである。ダラエ・ヌールの責任者サイド医師を（2000年、引用者注）九月中旬に更迭し、初期計画の大幅な見直しが始められた。もっとも、この排水作業で大勢の者が救われてきたのだから、あながち無駄だったとばかりは言えない」（中村、2001：46）。

## 2. 適正技術の効用

中村ら井戸掘りの素人集団による作業が予定通り進捗しないなかで、応援要請に応じて駆けつけたのが千葉に本部をおき、アジア・アフリカの各国で井戸掘りの指導を行ってきたNGO「風の学校」の中屋伸一であった。中屋はツルハシとシャベルを使った無謀な作業（最深40m）を中止させ、20mを限度として、落石に備えて作業員にヘルメットを着用させ、パラシュートの布地を筒状に縫った落石防止ネットも導入し、井戸底での酸欠死を防止するために予めランプをつり下ろして、灯火が消えないことを確認してから作業を開始することも教えた。さらに、「現地で入手できるあらゆるものを使いこなし、役立てる以外に方法はなかった。改めて考えてみると、みな旱魃前までは自給自足で済ませてきたのだから、水や井戸についても住民がなにがしかの知恵を出せる筈である。（中略）もちろん現地には、伝統的な井戸掘り・汲み出し技術がある。その一つに水壺をロープに吊して下ろす『チャルハ』という道具があった。住民が井戸底をさう時にも使われる。（中略）昔から人々の使い慣れたものが結局良い結果を生んだ。後には、庭石を持ち上げるチェーン・ブロッカーで巨礫を吊り上げたり、ダイナマイトで爆破処理させたりしたが、いずれも現地の道具に小さな工夫を加えたものである。ボーリングをはじめ、外部からのアイデアは思ったほど成果が上がらなかった」（中村、2001：69-71）。ダイナマイトも爆発物の扱いに手慣れた地元の元・ゲリラ指導者の職員が、埋設地雷や不発弾から火薬

を抜き取って作った。徹底した「地元にあるものを使う」方法が活かされていたわけである。その中村でさえ、「八方手を尽くして駄目で、しかも次々と涸れてゆく井戸をみて焦燥感に駆られる。そこに堂々たるやぐらを組んだボーリング機械が、強力な鋼鉄のワイヤの巻き上げ機械で駆動され、ズシンズシンと地響きを立てて働いていると、その威容に圧倒されて、何だか心強く、唯一の頼みの綱のような気がしてくる。私もまた、一時この「機械信仰」に駆られ、ボーリング機械さえあれば何とかできると考えた一人である。冷静なのは、これをきっぱりと否定した中屋氏だけであった。（中略）ツルハシとシャベルが機械力を圧倒した。（中略）巨礫の引き上げは、中屋・蓮岡（PMS 職員、引用者注）両氏の道具の改良によることも力になった。（中略）PMS では、これ（中屋・蓮岡両氏による改良型のチャルハ、引用者注）に滑車を連動させて、一トンの石まで引き上げるようにしたから、驚くべきである。上手にロープを石にかければ、楽々と巨礫も引き上げられるようになった。中規模の石ならチェーンブロッカーをも導入した。蓮岡が造園会社で庭石を運搬した経験があったので、バザールで容易に改良型を発注できた。また、岩を削るノミは、戦車のキャタピラの鉄を使い、強靱で摩耗が少なくなった。地雷や戦車もこうして『平和利用』となり、あの戦乱を知る者は、多少溜飲を下げた」（中村、2001：95-96）。結局、中村らの活動は「だいたい掘ってみて水が出なかった所のほうが少なかったですね。現在約九六〇本の井戸が掘られています、その約九割の八七〇本で水が出てくるようになりました。（二〇〇三年六月現在、千本を超えた）。この二年半の間に私たちの推計では三〇万人がこうやって村を捨てずに留まっている結果になっております」（中村、2003：38）と「病気はあとでも治せるからまず生きておきなさい」と題した医学生向けの講演会で語っている。

## V. 医者、用水路を拓く

### 1. アフガニスタンをめぐる政治情勢の変化と緊急食糧援助

前章で述べたとおり、中村らは、渇水による感染症の診療と併行して、アフガニスタン国内での緊急の旱魃対策としてカレーズの修復と井戸の掘削による飲料水確保をすすめたが、国内外の政治情勢の変化によってもまた、中村らは新たな課題に直面した。すなわち、1990年代半ば頃に台頭したターリバーンが1996年に首都カブールを制圧し、その後、国土の90%を実効支配するまでに至ったが、国連安全保障理事会が一連のアフガニスタン制裁決議を可決すると援助は途絶え、旱魃によって沙漠化した農地を棄てて都市に流入した農民は、飢餓状態に陥った。さらに2001年の「9・11同時多発テロ」の影響は大きく、中村らPMSの日本人職員も在パキスタン日本大使館の勧告に従ってアフガニスタンから退去した。このときのやりとりを中村は「狼狽した反応は、日本側から届けられた。イスラマバードの日本大使館は、『邦人保護』の立場から、アフガン内の日本人の退去を要請してきた。担当官は私の立場を知っていたので、同情の気配が感ぜられた。当方としては、『事件の報道直後にあわてて逃げるとあっては日本人の沽券に関わる。今後の現地活動のこともある』旨を伝えた。だが、大使館の立場も汲み、『一時退避しても良いが、[大使館の命令で一時仕方なく退去する]と公言してよいか』と尋ねると、『それで構わない』との返事だった。目黒・蓮岡（PMS職員、引用者注）の家族やペシャワール会の会員も心配しようから、ここは我慢であった」（中村、2007：20-21）と書き記している。ジャララバードの職員87名はペシャワールで待機を命じられたが「家族をアフガン内に抱える者は、誰一人ペシャワールに逃れようとしなかった」（中村、2007：22）。裕福な市民は国外に脱出し、国内の都市に取り残されたのは行き場のない貧困層であると読んだ中村は、有り金を叩いてカブールに緊急食糧配布を指示した。そして日本に帰国した直後、中村は、民主党（当時）の推薦で衆議院テロ対策特別委員会の参考人質疑に招かれ「自衛隊派遣は有害無益、

飢餓状態の解消こそが最大の問題」と発言し、委員長から発言の取消しを求められる物議を醸した。しかし、この発言の反響は大きく、10月末までに2億円、2002年1月までには6億円に迫る募金がベシヤワール会に寄せられた。その結果、15万人が越冬できる量に相当する1,800tの小麦と20万ℓの食用油が空爆下のアフガニスタンに届けられた。

その最中に、中村は、悪性神経膠腫（脳腫瘍）に冒された10歳の次男の最期を看取った。「幼い子を失うのはつらいものである。（中略）空爆と飢餓で犠牲になった子の親たちの気持ちか、いっそう分かるようになった。人はしばしば自分でも説明しがたいものに衝き動かされる。公私ないまぜにこみ上げてくる悲憤に支配され、理不尽に肉親を殺された者が復讐に走るが如く、不条理に一矢報いることを改めて誓った」（中村、2007：22）。

## 2. 「アフガン・緑の大地計画」

現場に戻った中村は、「農村の回復なくしてアフガニスタンの復興なし」（中村、2007：84）と確信し、限界に達した地下水利用から地表水の利用、すなわちカレーズの復旧と井戸掘りからクナール河右岸に13km、毎秒6tの水を沙漠化した耕地に注ぐ灌漑水路建設に取り組むことを決意した。福岡ではベシヤワール会のボランティアが東奔西走して協力してくれる専門家を探した。のちに中村は「『自分が専門家だったら決して手をつけなかっただろう』と思えることばかりである。圧倒的な物量と機械力、精密な測量と理論的研究を誇る日本の公共土木技術は、世界屈指のものである。それだけに専門分化が著しくて門外漢の入る余地が少なく（中略）日本の土木技師がやってきてもすぐに役に立つとは思えない。（中略）医療も含め、『技術者』には『モノのない現地に合わせて何とかする』訓練が不可欠で年余をかけて自らを再教育せねばならぬことが多い」（中村、2007：95）と振り返っている。その上で特に心がけたのは「(1)なるべく単純な機器で対処できること、(2)多大のコストをかけないこと、(3)ある程度の知識があれば、地域の誰にでも施工できること、(4)手近な素材を使い、

地域にないものはできるだけ持ち込まないこと、(5)壊れても地域の人で修復できること、(6)水はごまかせない。水のように正直なこと」（中村、2017：3-4）であった。

### 3. 灌漑水路の建設

2003年3月、地方政府の要人、ジャララバード北西のシェイワ郡の長老らを集めて着工を宣言、5月には測量を完了して工事が動き出した。噂を聞きつけた近隣の農民がシャベルやツルハシを手にして集まり、その数は700名を超えた。十分な土木機材はなく、脆い岩盤は「ジャバル」と呼ばれる鉄棒で剥ぎ落とし、人海戦術による掘削が開始された。「農業土木は、大部分が農民であるアフガニスタンで医療よりも更に身近であるから、『それなりのものがある』と確信していた。現に、カネはなくとも、二〇〇〇万人が生活してきたのである。事実、その後の経緯は、これを実証した」（中村、2017：115-116）。しかし、所詮は素人集団である。測量ミスも発覚し、文字通り紆余曲折しながらの工事が続いた。苦労して入手した重機も、操作できるのは当初は日本人スタッフ1名だけであった。「ウンボの操作ができる男性」の公募に応じて、日本から来た鉄工所の経営者が操作技術を指導し、ようやく重機の活用に漕ぎ着けた。中村は、年に数回の手術のほか着工から4年間、工事現場を離れることができず、ペシャワールのPMS病院の診療は、副院長以下の医師らに委ね、病院全体の運営は、ペシャワールで12年間働いた日本人看護師を「院長代理」に据えて、遂に中村は「白衣を脱いだ」（中村、2017：125-126）。

### 4. 斜め堰、蛇籠、柳枝工の効用

当初、灌漑水路の取水口に川の水を導くために、流れに対して直角に堰を伸ばす工法を試みたが、川幅が狭くなるにつれて流れは速くなり、せっかく投入した巨石も流し去った。そんな折、中村は、台所の流しに置かれた桶に水が垂れているのを見て「はたとひらめくものがあった。（中略）少し桶を傾けると、

こぼれる水は幅が狭く、流れは急になる。流量が同じなら、流路の幅を上げると浅い流れになる。（中略）そう思って（筑後川の、引用者注）山田堰を思い出すと、先人たちが（中略）洪水と決壊と飢饉とを数え切れないくらい経て、真剣勝負で到達した結論だったに違いない」（中村、2017：127-128）と確信した。2004年に斜め堰の造成に着手、改良を重ね、さらに「堰板方式」<sup>11)</sup>で水面近くの水だけを1.6km先の沈砂池に流し込み、再度、「堰板方式」で水面近くの水だけを取れば澄んだ水が水路に流れ込む。沈砂池は数年に1度の浚渫で維持管理できる。これは阿蘇山系で火山灰土が水路内に堆積しないように工夫された白川の「鼻ぐり井出」、加藤清正のアイデアの応用であった。

灌漑水路の護岸は、鉄線を編んだ籠に石を詰める蛇籠、ふとん籠が採用された。蛇籠は「1、どんな山の中でも輸送が楽であること 2、アフガニスタンのどこに行っても大小の石材が無制限に得られること 3、多少訓練を積みば現地農民なら簡単に作れること 4、コンクリート構造物よりは遙かにコストが安くつくこと 5、コンクリートのようには割れず、形を自由に変え得ること 6、壊れても修繕が簡単であること 7、植物が繁殖しやすく、柳枝工<sup>12)</sup>と組み合わせれば風情があること」（中村、2017：138）であった。護岸にはコリヤナギ、土手の外壁の強化にクワ、高い土手の外壁には乾燥に強いオリーブ、遊水池の防災林にはユーカリを植樹し、蛇籠を編む亜鉛メッキ鉄線だけはパキスタンから調達した。しかし、この「緑の大地計画」は、人災と天災に見舞われ続けた。第1に、一時は耕地の沙漠化で難民となった農民が村に戻って灌漑水路用地に住み着き、土地の収用を拒んだ。ターリバーン政権崩壊後、ジルガ（長老会）による共同体自治機能が弱体化したためである。急遽、村の長老たち、郡長、地主、PMSが協議し、政府による地主への補償と引き替えにジルガがPMSによる事業の妨害禁止を村人に達した。第2に、2005年6月、現地は52℃の観測記録を更新する猛暑に見舞われ、急速に解け出した雪解け水によってクナール河が増水し、土石流に見舞われた灌漑水路は決壊、砂礫による埋め潰しの被害を受け、浚渫と修繕を繰り返す羽目となった。さらに増水に伴う河の流れ

路の変化は、灌漑水路の外側からも護岸を蝕み、石出し水制の追加工事による流路の修正と護岸の強化が必要になった<sup>13)</sup>。この結果、激流は河の堤防道路を挟んで走る灌漑水路から遠ざかったもの、今度は対岸の村から農地が流失したとの苦情に対処しなければならず、さらに、軍用補給路になっていた堤防道路を補修しなければ、灌漑水路の設計変更を免れないといった事態が次々に発生した。

2007年4月に、灌漑水路第1期工事は、完成した。『『マルワリード用水路』は総延長一三・一キロメートル、造成分水路七・二キロメートル、一日最大送水量五〇万トン、既に沙漠化から回復して耕作できるようになった田畑が八〇〇町歩（1町歩≒9917㎡、引用者注）、渇水時に送水できる既存の耕地は約二千町歩、第二期工事によって潤し得る灌漑面積が推定五千町歩以上」（中村、2017：340）、「労苦を共にしてきたのは、主に周辺農民たちであった。彼ら自身が有能な石工であり、蛇籠工であり優れた水の観察者であったことは記されて良い。この工事に携わった作業員は四年間で延べ三八万人（中略）、事故による重傷四名（中略）、事故死は一名も出さなかった」（中村、2017：339）。灌漑水路建設と併行してソバやサツマイモの作付け、飼料生産の改善、茶の栽培、穀物収量の増加なども効果を上げた。

## VI. 開発協力論からみた中村の仕事：まとめにかえて

### 1. 中村のリーダーシップ

さきにも述べたとおり「三無主義」が、中村の理念、方法、実践の指針を表している、というのが筆者の解釈である。また、患者、難民、貧農という社会的弱者の救済が中村の至上命題であり、「臨床医学は、結果で勝負がつく。つまらない論争をしても仕方がない。治るか治らないかがものを言うのである」（中村、1999：65）や「口先ではなく、やることで勝負する」（中村、1999：137）のが、中村流であった。議論や会議を嫌う一方で、井戸掘りや灌漑水路建設に



については、謙虚に専門家の助言に耳を貸し、自ら研究、実踏調査する手間を惜しんでいない。そして具体化された活動方針や事業目標について筆者は、中村から「上意下達」され、ときに苛酷な指示が発せられたという印象をもっており、それを周囲が容れ続けた背景や、冷徹にも至上命題の前には躊躇せず仲間を解雇・更迭しても事業が崩壊しなかったことを、中村のカリスマ性によるとしか説明できない。他方で、中村は73歳にして自らの「出口戦略」を構想し、書き残していないことが、中村亡き今日、筆者が、今後のペシワール会の事業の推移を心配する所以である。

また、サンダル工場の開設、井戸掘り、灌漑水路の建設が、疾病の予防と農村復興の土台をなしていることからして、中村は、医学は自然科学であるが、医療は社会科学である、と考えていたのではなかろうか。

さらに、諸事業を中村の信条抜きには語ることができないのも事実である。「私はおそらく骨の髄まで日本人であって、恩義や義理だのという古くさい観念から抜けきれない」（中村、1999：136）と語り、著書において約束を守る、誠意を尽くす、といった場面が頻出すると同時に、人から受けた恩義や誠意にも敏感に反応している。中村は、著書のなかで「弱い者は人の誠意を敏感に嗅ぎ取る」（中村、1999：65）と表現しているが、「弱い者」の範疇には社会的弱者のみならず、自分も含んでいたのかも知れないと筆者は考えている。

## 2. 中村の協力手法と課題

中村らの諸活動は、信頼関係を基礎とした受益者の「参加」と適正技術の導入に依った。これらは、結果として成果物に対する受益者のオーナーシップを確立し、成果物利用の持続性を担保することに貢献したことは間違いない。しかし、将来にわたって受益者が自らの生活状況に新たな問題を発見し、その問題解決のために自らを組織して、必要な対策を決定し、協働を介してその対策を計画・実施・評価できる「開発の主体」に成長する潜在力を涵養できたか否かは、疑問が残る。むしろ、「第二の中村」ともいえるカリスマ的な支援者の出

現を期待することはないであろうか。

## Ⅶ. 中村は、なぜ殺されなければならなかったのか

中村は、万人に敬愛されていたわけではない。中村らを殺害したのは、公的であるか私的であるかまでは特定できないが、彼らを苦々しく思っていたナンガルハール州北部の実効的支配者とその取り巻きである、というのが筆者の仮説である。一般的に、地域の実効的支配者は、社会の不安定と人々の貧困を糧として、武力を背景に勢力を維持、拡大、永続化しようとする<sup>14)</sup>。平和なムスリム社会が復活しても地縁、血縁、姻戚関係で結ばれた集団が武器を置き、自ら利権を貪る支配者の座から下りることはない。他方、旱魃や内戦で困窮した農民は、家族を養うためなら麻薬の原料となるケシを栽培し、現金収入と引き換えに彼らの戦闘員、いわば傭兵ともなる<sup>15)</sup>。ムジャヒディーン（イスラーム戦士）となり、異教徒と戦うのはアッラーがお決めになった汝の予定（運命）であり、死ねば殉教者として天国に召され、一族の名誉となる、というのは後付けの謳い文句に過ぎない。彼らの資金は、私的な集団であれば、海外の支援者からの喜捨、公的な集団であれば、中央政府や国際機関から流れる公金の横領、賄賂、公的にも私的にも彼らが課すさまざまな税金、援助物資の横流し、麻薬密輸や武器貿易、人身取引まであらゆる手段によって捻出される。もちろんなかには傲慢にもイスラーム世界を土足で蹂躪する異教徒に対する義憤から、右の集団に加わる者もいるには違いない。いずれにせよ、中村とPMSは、長年に亘って彼らが築いた利権秩序を乱す存在であり、その活動範囲が間近に迫ってくれば、看過することなく排除しなければならない。アフガニスタンでは長い内戦のうちに誰もが銃器の扱い方を身につけている。手際に善し悪しはあっても、待ち伏せ攻撃は手慣れたゲリラ戦術である。中村らの活動はすでに成果を上げており、農業の復興がすすみ、農民の生活が安定すればするほど、支配者集団はその存立基盤を切り崩される、という危機感を募らせたのではなか

ろうか。しかし、さきにも述べたとおり、真相は捜査の結果公表を待たなければならない。

## おわりに

筆者は、生前の中村とは面識はなかったが、一度だけバンコクの空港近くのホテルで夕食のテーブルが隣り合わせになったことがある。おそらく翌朝の便でアフガニスタンに戻る途中だったのであろう。筆者もカンボジアに帰る途中であった。日頃伝え聞くエネルギッシュな活動とは裏腹に、中村の風貌は、赤銅色に日焼けし、脂気のない白髪頭に口ひげを蓄えた、小柄な、初老の農民のそれのようであった。忘れていたこの記憶を呼び戻し、本稿を執筆する動機となったのが、皮肉にも今回の事件である。そして、まずは中村の著作を手に入れようと大学図書館、公立図書館のデータ・ベースを検索したところ、それらの多くがすでに貸し出されており、なかにはさらに多くの予約が登録されている著作まであった。中村は、こうした著書やペシャワール会の会報、講演、マスコミの取材に応じて多くの人にペシャワールやアフガニスタンの実状と自らの活動を伝えてきた。さらに多くの人々が中村の働きに関心を寄せる契機となったのが彼の死であったことは、まことに悲劇以外のなにものでもない。

なお、「」で示した引用部分においては、漢数字、固有名詞の表記はそのまま使用した。

## 注

- 1) 「辺境から中心を撃つ礫—アフガニスタン難民の生存を支援する中村哲医師とペシャワール会の実践」において清水は、「中村自身が、自らの活動や信念や歴史的存在を確認したり、認識したりする枠組みとして、アジア主義を明言しているわけではない。当人が名乗りもせず認めてもないのに、『～主義（者）』と示唆することは、ひょっとしてとんでもない傲慢と不遜かもしれない」と初瀬の「中村の活動や信念＝アジア主義」論を批判する。
- 2) 「グローバル化時代のアジア主義—中村哲の場合—」、初瀬は、条件付きで中村がトランス・ナショナルなアジア主義的世界認識を用いていると結論づけている。

- 3) 丸山は、中村を取り上げたNHKのドキュメンタリーに触発され「この医師は何に突き動かされて、彼の地でいきているのだろうか」と興味をもち、1998年から2000年にかけて断続的に中村を同行取材し『ドクター・サーブ 中村哲の15年』を上梓した。
- 4) 元来、「癩(らい)」という呼称には差別的意味はないが、1940年代に有効な治療薬が開発されてもおお「不治の病」というイメージが人々のあいだに定着し、日本でも「らい予防法」(1953年公布・施行、1996年廃止)に基づく国の患者隔離収容政策とも相まって、患者とその家族に対する差別や偏見、排除が容認された長い歴史がある。筆者は、当時の固有名詞や直接の引用である場合を除き、癩菌発見者の名前に由来するハンセン病と表記する。なお、中村自身は著書のなかで「敢えて過去を匿名にしないために『らい』という医学病名を使用」(中村、1999: 27)している。
- 5) 限られた任期で発展途上国に派遣される専門家は、日本での仕事の流儀、常識を無意識に現場にもち込むことに注意する必要がある。着任直後の高揚感や優越感、充実した日々への過度の期待感は、現地の習慣や実状を弁えない無礼、自己の振る舞いや言動を内省しない自己正当化、事業の相手方に対する尊大な態度として現れ、現場に軋轢を生じさせて周囲の期待は落胆に代わる。また、計画遂行と予算執行に拘泥する硬直した使命感と任期中に実績を上げなければならないという焦燥感、理想と現実の乖離に悩む無力感、さらに相手方との信頼醸成の失敗を先方に責任転嫁しても、思い通りにことが運ばない現実への失望感、熱意と善意が理解されない疎外感、日本から遠く離れた孤独感に苛まれ、現地のすべてに嫌気がさす。「一年目二年目は寝て待て」とは、焦らずに周囲を観察し、相手方のニーズとその発見・解決能力、問題の所在とその原因、問題解決を阻む要因を把握し、現地に順化し、周到な準備の上で仕事に取りかかれ、という戒めが込められている。
- 6) ここでいう「援助の法則」は、普遍的、科学的で再現可能な術語としての法則ではなく、国際協力実務家のあいだで共有されている、ある種の経験則、経験知という意味である。中村が予めこの「法則」を心得ていたか否かは、今となっては確認する術がない。
- 7) アフガニスタンをめぐる地域情勢と国際関係については、嶋田晴行(2013)を参照せよ。
- 8) 「三無主義」についての中村自身による説明として、(中村、1993a: 208-212)、(中村、1993b: 166-170)も参照せよ。
- 9) 中村は、ハンセン病治療とベシヤワール会、自身の活動を「らい診療関連略年表」(紀元前5世紀から1999年まで)として整理している(中村、1999: 85-88)。
- 10) 中村の著作に頻出する、「ジハード(聖戦)」について、筆者は、第1に、一般論としてジハードは、アラビア語では元来、一生懸命、奮闘努力という意味であって、転じて懸命に信仰を守るという趣旨で使われてきた。勿論、その延長線上には、イスラーム世界の防衛のための武力行使も想定される。しかし、マスコミ用語としての「聖戦」がひとり歩き

し、「テロとの闘い」というプロパガンダが日本や西欧諸国で浸透したことも相まって、イスラームは好戦的な宗教で、ムスリム（イスラーム教徒）は狂信的で暴力的な恐ろしい人々という誤った印象が定着したと考えている。第2に、ジハードを「ムスリムに課せられた『六信五行』の義務の一つ」（中村、1993a：49）という記述について筆者は、六信は、ムスリムがその存在を固く信じるものであると理解している。また、五行は、ムスリムが日々の生活のなかで実践すべき儀礼的行為、宗教的義務を指すと理解しており、武力行使としてのジハードは六信五行に含まれないと考えている。しかしながら、当時のアフガニスタンの時代状況において、ムスリムが異教徒であるソ連軍の侵攻や親ソ社会主義政権の内政、欧米の対アフガニスタン政策に対する憎しみを拡大、深化させ、イスラーム世界と一族の名誉を守り、親族、同胞の仇敵に復讐するのはムスリムの義務である、という意識を強くもったことは、想像に難くない。なお、蛇足ながら、中村の著作に散見される「イスラム原理主義（者）」という言葉も、キリスト教原理主義（20世紀アメリカでの宗教運動）に由来するマスコミ用語で、伝統的なイスラーム社会の近代化、西欧化に抵抗してイスラームの根本への回帰を目的とする運動やムスリム組織はさまざまに存在するものの、理論的に体系化された特定の「主義」を示すものではない、というのが筆者の理解である。

- 11) 取水口に手動の「堰板」をはめ込み、チャルハで上下させれば川の表面の水（上水）だけを水路に引き込み、取水量の調整と土砂の流入抑制が可能となる。堰板に使用されたヌーリストン産のヒマラヤスギはマツ科で水に強く、簡単に取り替えることができる。
- 12) 蛇籠と組み合わせれば、柳の根が生きた網を形成し、籠の中の石材を固定、強化する。
- 13) 石出しは、岸辺から長さ15-30m、幅10m程度の蛇籠の突起を25-100m間隔で連続して設けて激流を遠ざける工法で、設計、施工には対岸への影響に注意する必要がある。
- 14) 筆者は、敢えて彼らをイスラーム過激派とかテロ組織とは呼ばない。前者は、学術用語ではないし、後者には、加害者を敵視し、被害者の側に立つという明確な政治性が投影されるからである。たとえば、幕末の新撰組も佐幕派からみれば都の安寧を守る強力な治安維持組織であり、討幕派からみれば国家権力の庇護の下にあるテロリスト集団である。
- 15) ターリバーンが非合法化したケシ栽培は、小麦の約100倍の収入をもたらしたために政権崩壊後に復活し、2006年には世界の需要の93パーセント、翌年には世界の需要をほぼ独占したという（中村、2017：8）。

## 参考文献

- 井筒俊彦（訳）（1957）『コーラン』（上）、岩波書店
- 嶋田晴行（2013）『現代アフガニスタン史 国家建設の矛盾と可能性』、明石書店
- 清水展（2007）「辺境から中心を撃つ礫—アフガニスタン難民の生存を支援する中村哲医師とベシワール会の実践—」、松本常彦・大島明秀（編）『〈九州〉という思想』、九州大

学大学院比較社会文化研究院

- 中村哲（1992）『ベシャワールにて―癩そしてアフガン難民―増補版』、石風社
- （1993a）『ダラエ・ヌールへの道 アフガン難民とともに』、石風社
- （1993b）『アフガニスタンの診療所から』、筑摩書房
- （1999）『医は国境を越えて』、石風社
- （2001）『医者 井戸を掘る アフガニスタン早魃との闘い』、石風社
- （2003）『医者よ、信念はいらない まず命を救え！ アフガニスタンで「井戸を掘る」医師』、羊土社
- （2001）『医者、用水路を拓くアフガンの大地から世界の虚構に挑む』、石風社
- （2017）『アフガン・緑の大地計画―伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業―』、石風社
- 初瀬龍平（2005）「グローバル化時代のアジア主義―中村哲の場合―」『現代社会研究』8号
- 丸山直樹（2001）『ドクター・サーブ 中村哲の15年』、石風社